

敗北の「抱きしめ」方

——ドイツと日本——

高橋秀寿

はじめに

この連続講座は西川長夫氏の「個人的体験」に関する報告から始まった。日本の植民地に生まれ育った西川氏は、敗戦後に避難と抑留と逃走をくり返して占領下の日本によく帰ってくるわけだが、「米兵と腕を組んで歩く派手な姿の女たち、進駐軍のジープを追いかけてガムやチョコレートを手がかりに子供たち」という植民地的風景を目の当たりにし、周りの大人や子どもたちがそれを屈辱として感じていないことに驚く。当時は植民地にいることをまったく意識しなかったのに、「占領下の日本の屈辱的な現実」を受け入れることができないことで、自分が植民地に生まれ育ったことを自覚し、植民地主義を理解し始めたという。日本の戦後体制を植民地化として認識した原体験に氏の「<新>植民地主義」論の原点があるわけだが、筆者の研究対象であるドイツも第二次世界大戦の敗戦国であり、西川氏が屈辱に感じた占領下での「植民地主義的風景」も同じように展開された。この「屈辱的な現実」に西ドイツ人はどのように対応したのか——本稿はこの問題を考察することによって、植民地の保有と維持を目的にして侵略戦争を行なった国民国家が、敗戦と占領を経験することの意味を問い、連続講座の総括に代えてみたい。

1. 敗北と占領

「敗北主義（Defeatism）は帝国に広まっている。徹底抗戦の感情を示すものは見られなかった。住民の多数は戦争が即時に終結することを望んでいる。この人びとは連合軍の占領を、たとえ敗北の犠牲を払ってでも受け入れようとしている。」¹⁾

アメリカ軍の諜報部兵として従軍し、ドイツ人の心理状況を調査したS.パドローファーは、戦争末期のドイツ住民の心理状況をこのように伝えた。ナチスの住民意識調査によれば、「敗北主義」がおもに広がっていたのは市民層だったが、労働者層はまだ抗戦の意志をもっていたという。²⁾このような状況のなかで、戦争の終結を目指して能動的にナチ体制に抵抗する心理的余地をこの「敗北主義」は残してはいなかった。ともかく人びとは戦いながら、「敗北」という終戦を待っていたようである。問題は、敗北をもたらし、占領を行なうのがいったい誰であるのかであった。

徹底抗戦を鼓舞するために、ナチスはアメリカ兵とその占領政策の残虐性を訴える反米キャンペーンを展開した。³⁾しかし、このキャンペーンが効果をあげておらず、「洗練された」国民であるアメリカ人に対してドイツ住民が不安を抱いていなかったことを、その調査は確認して

いる。⁴⁾ ドイツ住民が恐れていたのはロシア人による敗北と占領だった。この恐怖心はナチスのプロパガンダだけに由来していたわけではない。ユダヤ人の絶滅政策とは異なり、対ソ戦におけるドイツ軍の残虐行為は帰還した兵士などによって広くドイツ国内に知れ渡っていた。そのため多くのドイツ人は報復を恐れ、プロパガンダで広められたロシア人の「野蛮・残虐性」のイメージは真実味を帯びてしまったのである。パドーファーによれば、ロシア人を「未開」で、「野蛮」で、「卑劣」だと非難することで、当時のドイツ人は自分の不安と罪意識を振り払っていた。ある少年は、「ドイツにとっての唯一の希望はアメリカの援助を受けてロシア人と戦い、殺すことにある」と洩らしたという。⁵⁾

この少年の「希望」はこの当時けっして突飛なものではなかった。ゲッペルスは45年2月のラジオ放送演説で、ドイツ軍が東部戦線で後退している「唯一」の理由を「金権政治-ユダヤ人によって導かれているアメリカ合衆国がソ連の暴兵を側面から援護し、ボルシェヴィズムを今でもいつでも叩き潰すことのできるわれわれの手を縛りつけていること」に求めた。⁶⁾ ヒトラーから後継者を任命されたデーニッツも、彼の死亡を国民に知らせる報告のなかで、軍事的戦闘の継続の目的を「ボルシェヴィズム」からのヨーロッパの防衛にあるとし、この目的を妨害するかぎりでは英米軍とも闘わざるをえないと訴えている。⁷⁾

こうしてドイツ住民は、敗色が濃厚となった状況のなかで、英米軍の進軍に救いを見出していた。とくに市民層は「群衆支配」を恐れ、「アングロ・アメリカによるドイツ占領によって私たちのところにボルシェヴィズムが来ないように希望」⁸⁾ していたという。この「希望」がアメリカ軍の占領によって叶えられたとき、多くのドイツ人がその「喜び」と感謝の気持ちを占領後のアメリカ人に伝えている。パドーファーはその声を幾度か聞いた。

「…ドイツ兵は銃を下ろし、喜んで降伏した。将校でさえ闘わなかった。ある将校は、私たちの歩兵隊を見たとき、声高に叫んだ。「ありがたいことに、アメリカ軍がそこにいた。」⁹⁾ 「看護婦が聞こえないところで、その医師は歩調を緩め、私の耳元でささやいた。「あなたに内密に言いたいことがあります。ありがたいことに、すべてが終わりとなりました。あなた方アメリカ人がここにいてくれてうれしいです。」¹⁰⁾

アメリカ諜報部兵 R. Th. ベル¹¹⁾ も、ドイツ人経営者との会話のなかで「ロシア人ではなく、君たちがここにいてくれてほんとにうれしいよ」とその「喜び」の声を聞いたが、彼らはソ連の脅威を訴える「赤い危険」のカードを差し出し、ゲッペルスやデーニッツと同じ戦争解釈を披瀝した。連合国の「爆撃テロ」がなければドイツはソ連を打ち破っていたはずであり、西欧をロシア人の脅威から救うために闘っていたドイツ人は「アジアの群れ」に対する「西欧文明の真の防衛者」である、と。ドイツの戦争責任を追及し、ドイツ人を処罰することではなく、手を結んで「ボルシェヴィズム」と闘うことが互いの利益になることを訴えた彼らは、米ソの対立がアメリカから有利な占領政策を引き出しうる「カード」となりうることを認識していた。そして、この対立が生じることをドイツ人は早くから察知していたようである。46年3月のアメリカ軍の意識調査¹²⁾ によれば、アメリカ占領地区で報告された「扇動的な流言」の85%が「米ソ戦争」に関するものであった。冷戦に基づく戦略的思考がすでに始まっていたのである。

この「喜び」をのちの世論調査も確認している。1947年の春と夏にアメリカ占領地区とベルリンの英米地区で行なわれたアメリカ軍の世論調査で、ドイツを公正に扱う点でアメリカがも

っとも信頼されており（63%）、イギリス（45%）、フランス（4%）がそれに続いたが、ソ連はゼロを記録している。アメリカ占領地区では84%が「もし歴史がくり返すならふたたびアメリカ占領地区を選択する」と答えている。¹³⁾ また、「占領における1945年のあなたの経験」を問うた1950年6月の世論調査（表1参照¹⁴⁾）も、ドイツ市民の圧倒的多数がロシア軍の占領に不快を感じ、それと比較してアメリカ軍、とくにイギリス軍の占領はかなり好意的に受け入れられたことを示している。

表1

	イギリス軍占領	アメリカ軍占領	フランス軍占領	ロシア軍占領
不快	37%	49%	65%	95%
好感	16%	15%	7%	1%
実感なし	47%	36%	28%	4%

しかしそれでも、アメリカ軍の占領に対してほぼ半数が不快感を示し、好感をもてた市民は15%に過ぎない。西ドイツにおける51年9月の世論調査¹⁵⁾では占領政策における最大の「過ち」として、工業施設のデモンタージュと破壊（21%）と並び、ヤルタ・ポツダム会談における「ロシア人に対する誤った態度」（15%）が上位を占めた。ロシア人と手を結んでドイツに敵対したこと、すなわちアメリカに託した「希望」が満たされなかったことが非難されているのである。占領の受け入れが冷戦に基づく戦略的思考によるものであったことがここでも確認されよう。この世論調査はつづいて「ドイツにおける占領軍の生活様式と態度」（14%）、「ドイツ人の誹謗と不当な告発」（11%）を「過ち」としてあげているが、この数字は占領がナショナルな自尊心に関わる問題だったことを示唆している。

「非ナチ化」政策に対する抵抗感もまた、占領政策に対するドイツ人の態度を明らかにしてくれる。その心理状態を調査したアメリカ人はこの点で困惑する実態に直面した。非ナチ化政策によってアメリカはドイツからナチズムを払拭しようとしたが、多くのドイツ人は旧ナチ黨員も含めて「私はナチスではなかった」と主張したのである。「ナチス」とはその世界観を政治的に受け入れた者であり、経済・社会的な理由からナチ党を支持し、入党した自分たちは「ナチス」ではない、というのだった。バドーフアーは、「私たちはもう二ヶ月もこの仕事に就いて多くの人たちと話し、たくさん質問して、一度も、一度たりともナチスを見つげなかった」¹⁶⁾と、くり返されるその発言に食傷した。同じ諜報部兵のLt. D.レーナーも、「経済的地位を改善し、その地位を保持し、あるいはかかわりをもつためにはナチスで「なければならぬ」かった」という「ムス・ナチ」の「ずうずうしい」論理に呆れた。そしてこの自己正当化に彼は、ドイツ人に「敗北とその含意の明確な意識がまったく欠けている」理由の一つを見ている。つまり、「連合軍はドイツを養い、復興する援助をしてくれるだろう、上級党役員以外にドイツ人は罰せられないだろう（あるいは罰せられるべきではない）」と大半の者が見込んでいたのだという。¹⁷⁾ 戦争犯罪裁判がこの「上級党役員」を告発していたかぎりでも、大半のドイツ人はその裁判を「公正」とであると判断することができた。¹⁸⁾ しかし、（準）公職からの追放や罰金などによって実益を損ないかねない「非ナチ化」の問題になると、事情は異なった。西側地区における48年

8月の世論調査では、非ナチ化が「(たくさん欠陥はあったが) 目的を達した」と見なした者は14%に過ぎず、4割が「必要だったが、その実施は誤っていた」、3割が「必要でなく、その実施は誤っていた」、1割が「非ナチ化は占領軍の嫌がらせにすぎなかった」と、ナチ経歴の追究の実践に否定的な評価が下されている。¹⁹⁾「実施」に対する不満は技術的な理由によるものであった²⁰⁾が、ともかくこの政策の必要性をほぼ半数が否定していた。そして結果として、ナチズムの払拭という点で非ナチ化政策はなんら成果をあげなかった。アメリカ占領地区と西ベルリンを対象にしたアメリカ軍の世論調査で、「ナチズムは良い理念であったが、実行の仕方が悪かった」という見解に45年から47年にいたるまで53%、42%、55%のドイツ住民が同意したのである。²¹⁾では、ドイツ人はレーナーの言う「敗北とその含意」をどのように意識していたのだろうか？ この問題をドイツ人のアメリカ人体験から考察してみよう。

2. アメリカ人体験

強制労働者としてドイツ国内に生活していたロシア人とは異なり、占領軍が大半のドイツ人にとって最初に目にしたアメリカ人であった。まず、その軍事的物量にドイツ人は度肝を抜かれた。45年3月における体験をR.ファルクは次のように記している。

「占領のこの最初の日々にドイツ住民は、今まで見たこともない巨大な戦車も含めて、あらゆる種類と型のアメリカ軍の数限りない武器が途切れることなく都市を縦走する姿を驚きながら見つめた。卓越し、きわめて充実した軍需品だった。兵士たちの制服、武器、装備は最高のもので、食糧事情もすばらしかった。医療班がたくさん組織されていた。軍隊のすべての部分が機械化されていた。」²²⁾

ドイツ軍の敗北はこの物質的な優劣にも帰せられた。レーナーによれば、アメリカ軍の軍事的物量に圧倒されて、その勝利が軍隊の優秀性によるものではないことをドイツ人は確信し、「ドイツの優秀性の神話」を捨て去ろうとしなかったという。²³⁾

そしてドイツでもアメリカ兵は菓子類をばら撒き、物資力を誇示した。その行為がとくに子供に強い印象を残したことは40年後の調査²⁴⁾が明らかにしている。1945年に5 - 15歳だった子供の8割が1984年でもアメリカ軍に対するポジティブな記憶を保持しており、「甘い菓子類、チョコレート」、「食料品、援助物資」、「チューインガム」がその記憶の大半を占めている。大人もまた、占領軍を通してアメリカの豊かさを実感した。K.J.フィッシャーは47年の手記のなかで、「アメリカ地区の象徴」として次の光景をあげている。それは、豊富な物量によるドイツ占領の姿である。

「MPの白い目印のついたピカピカとラッカーが塗られたオリーブ色の軽いヘルメット、警察隊の黄一青一黄の色、健康な顔に巻かれた派手なネッカチーフ、筋骨たくましく、太った身体でちきれそうに膨らんだ制服、爆走するジープからかん高く鳴り響く緊急サイレン、ぶらぶら揺れ動くこん棒、「運転注意。死亡事故多発」。そして数え切れないほど大量の大小の自動車や巨大なトラック、形の美しい豪華リムジン。」²⁵⁾

この豊かさにあふれる勝者に惹かれていったドイツ人女性がいた。両者の恋愛関係は「親交(Fraternisierung)」と呼ばれ、彼女たちには「アメ公のスケ (Ami-liebchen)」という蔑称が張

りつけられた。²⁶⁾ アメリカ軍の算出では米軍関係者の50～90%がドイツ女性と「親交」していたという。パドファーは彼女たちの行動力に驚いた。

「ドイツ女性をものにするのは簡単で、おそらく世界中の白人女性の中なかで最も簡単だった。そして彼女たちの男への接近方法は、兵士たちに負けず劣らず巧妙だった。GIとドイツ娘はまるで磁石と鉄のように惹きつけあった。」²⁷⁾

アメリカ兵との「親交」の最大の動機は純粋な恋愛感情だけでなく、やはりその経済力にもあったようだ。「親交」した女性の家族が経済的に潤う姿を多くのドイツ人が目撃している。例えば、終戦後のベルリン市民の家族生活を調査したH.トゥルンヴァルトは、「親交」が闇市とコネ、菜園と並んで、食糧事情を改善するための重要な「補助資源」であったことを指摘している。²⁸⁾ また、娘がもたらした「物質的な施しもの」が家族生活にしばしば決定的な役割を果たしているため、両親が娘にできるだけ寛容に行動させていたという事実も確認している。トゥルンヴァルト自身は、「親交」が物質的・性的欲望だけに基づいているのではなく、「喜び、親切心、食料改善が満たされたことへの感謝の念」、すなわち広義の「生きる渴望」だと解釈している。²⁹⁾ おそらく適切な判断であろう。しかし、このような寛大な解釈に多くのドイツ人は与しなかった。多くはそこにドイツ女性の道徳的頹廃と同時に、自らの敗北の姿を読み取ったのである。

3. 敗北とセクシャリティ

R.アンドレアスーフリードリヒは1945年4月23日付の日記のなかで、雑踏の真ん中で首を吊り、その首から札を下げていた男性を目撃したことを記している。その札には「私、下士官のハインリヒ・レーマンは臆病のために女・子供を守ることができませんでした。だからここで私は首を吊ります」と書かれていた。³⁰⁾ どのような理由でこの男が自殺あるいは他殺されたのかは分からない。しかし戦争において「女・子供」を守れないことが男にとって「敗北」であり、死に値するものであることをこの札は象徴的にあらわしている。ベルリンで終戦の日々を体験した匿名の女性は、「祖国」のための死という男の「特権」を敵軍の首都進攻によって女たちも享受してしまったために、男に対する「すべての女たち」の感情が変化したことを45年4月26日付の日記で綴っている。

「私たちには気の毒に思うほど男たちはみすぼらしく、無力に見えた。弱き性なのだ。女たちのところで一種の集団的失望がいまにも噴出しようとくすぶっている。強き男を賛美する男支配のナチ世界がぐらついている——そしてそれとともに「男」神話も。…この戦争の終末に、男たちの男性としての敗北も多くの敗北の一つとなっている。」³¹⁾

そして「男性としての敗北」を見せつけられる出来事がドイツ国内で頻発した。敵国兵によるドイツ人女性のレイプである。ソ連軍がドイツ領土を占領するなかで、約200万人のドイツ人女性がレイプの辱めを受けた。³²⁾ 意図的にドイツ人男性の眼前でも行なわれたこのレイプは、ソ連兵の性欲を満たすだけでなく、ドイツそのものの征服と支配を示威する象徴的な行為でもあった。規模は異なるとはいえ、アメリカ兵からもドイツ人女性はレイプ被害を受けている。1945年1月から12月にかけてアメリカ兵に1500件の訴えが出されている。³³⁾

生き残った兵士たちは「敗者」として占領下の故郷に帰ってきた。再会した女たちはかつてとは明らかに異なっていた。男手なしにこの苦難の日々を送っていた彼女たちは自立していて、疲弊・憔悴した男たちを支え、あるいは「扶養」することになる。

「この主婦はまったく面倒見のいい母親であり、胃をひどく病み、食糧不足で静穏が必要であるけれど、本当に家族の要になっている。夫は受身に振舞い、行動力ある敏捷なこの主婦とはまったく正反対である。以前、この夫は稼ぎがよく、家にみやげに食料を持ってきたが、今ではその悪化する状況に意気消沈し、ちょっとした手伝いでも何度も急ぎ立てないと行動に移さない。」³⁴⁾

これはベルリンのある家族の姿であるが、もちろんすべての家族の、あるいは典型的な家族の姿でもないだろう。しかし、劣等感を抱いていた男たちの「敗者」の姿をこのようなジェンダー関係の逆転は映し出していた。この時期は「女の時代」^{シュトゥンデ}³⁵⁾と呼ばれることになる。シンボリックに表現するならば、男たちは「不能」となり、「勃起」していたのは勝者の兵士だった。男たちが戦場に赴き、戦死し、捕虜になったドイツの空間に、彼らを打ち破った勝者の「ペニス」が入り込んだのである。

敗者にとってレイプは、敗北の現実を見せつける屈辱的な行為であるだけではない。同意を前提としないこの暴力的な性行為は、自らの性的欲望を統御できない非文明的な人間の行為と見なされ、それを犯した国民と国家の野蛮・残虐性を象徴し、その占領が暴力に基づいた同意なき征服であることを意味したからである。敗北した国民はその犠牲者となることで、敗北と占領の不当性を主張し、それに対してふたたび闘うことが可能になり、勝敗を少なくとも心理的にペンディングすることができる。これが、反共をいわば国是とした西ドイツが東側に対して取った戦略となった。ソ連軍による殺害と略奪、東部地区からのドイツ人の追放、捕虜への強制労働といったドイツ人の「犠牲」のリストに、この大量レイプも書き加えられたのである。ほんらい女性が受けたレイプ被害は国民全体のものとされ、レトリックの上ではドイツ人全体がソ連兵によるレイプの「犠牲者」となったのである。そしてレイプの原因はロシア人の「アジア的」な野蛮性に帰せられた。「アジア出身のソ連兵が特別に無節操で、野蛮の点でぬきんでいた事実は、アジア的メンタリテイの傾向がこの逸脱行為の本質にかかわっていること」を国家的なプロジェクトとして編纂されたドキュメントは確認している。³⁶⁾

しかし、同意に基づく「親交」にこのような戦略を取りうる余地はない。ここでは「親交」した女性も、その国民も「犠牲者」にはなりえず、それ自体が敗北と占領の不当性を根拠づけることはできないからである。この事態にドイツ人はどう反応したのだろうか？

4. 「親交」とドイツ人

「親交」が敗北の屈辱感を実感させたとすれば、その行為に対する攻撃の矛先は敵国の兵士ではなく、同意した女性に向かわざるをえなかった。その攻撃の大半は非難や中傷といった言葉のレベルにとどまったが、「親交」した女性の髪を切るような暴力行為に走る若者集団も存在した。³⁷⁾ 1946年に流布された次の中傷ビラには、「親交」した女性に対する認識と感情が凝縮して表現されている。

「ドイツ女は淫らに外国人とやっている！／恥ずかしくないのか、おまえたち、ドイツ女よ？／おまえたちがわれわれ全員の顔に泥を塗りたくり、同時にドイツ女の名譽を汚していることはわかっているだろう。／ドイツ兵を打ち負かすまでに6年かかったが、ドイツ女を口説き落とすのに5分で十分だったのだ！／われわれはタバコも、バターもなく、外国人はコーヒーと砂糖をもっている。／おまえたちは、外国人が板チョコ一枚を差し出しさえすれば、その肌の色にはお構いなさだ。でもわれわれは、おまえたちが十二分に楽しんで、じきにロシア人のものになることを願っている。／そのときにおまえたちは自分のしてきたことをじっくり悟るだろう。そしておまえたちはドイツ男から見放されるだろう。」³⁸⁾

第一に、「親交」は恋愛ではなく、一種の売春行為と見なされている。しかも、彼女たちが性と引き替えに獲得しているのは生活必需品ではなく、「コーヒーと砂糖」や「板チョコ」のような奢侈品とされているから、「親交」は困窮した女たちの選択肢のない経済活動ではなく、私利的な物欲行為ということになる。ナイロンの靴下はその象徴的な「交換商品」であった。この行為に対する怒りは、保守層や教養市民層に広がっていた伝統的なアメリカ像³⁹⁾にも由来している。アメリカは「浅薄」な文化しかもたない物質主義的な社会とみなされたため、アメリカの軍事的勝利が「物質主義的」な優位に求められただけでなく、「親交」した女性も勝者の「物質主義的」な魅力に屈した非ドイツの女性とみなされたのである。

第二に、「親交」は、「6年」間の男たちの戦いに「5分」で白旗を揚げた女たちの「敗北」として解釈されている。だから、たとえ同意の上であっても、「親交」はレイプと同じように勝者による性の略奪となる。そして勝者に身をゆだねるその同意こそが、「ドイツ女」だけでなく、「われわれ全員」にとっての恥辱として感じられている。パッサウの牧師ランダースドルファーは、戦争によってドイツの名に塗られた恥辱に、彼女たちは同じ大きさの恥辱を加えたと非難した。「彼女たちは神の第六戒律を軽率に無視し、恥ずべき振舞いをするので、自分自身ではなく、民族全体そのものを貶めているのだ」⁴⁰⁾と。当時22歳のある女子学生は、敗者としての恥辱を抱えて帰還した兵士たちがこの「敗北」行為を目撃することを恐れ、彼らの声を次のように代弁した。

「ドイツ民族にはもう名譽はないのですか。私たちの若い男たちが待ち望んだ自由の身になって、こんなドイツを見たなら、その精神は崩れてしまうにちがいありません。／戦争に負けることもあるでしょう、自尊心を傷つけられることもあるでしょうが、名譽を自ら汚す必要などないのです！」⁴¹⁾

第三に、「肌の色」と「ロシア人」の言及からは、「異人種」間の「親交」が最も恥辱的な行為であり、そのような「親交」がドイツ人共同体からの追放を意味することが暗示されている。ブレーメンの社会民主党のある女性党員は黒人兵との「親交」を「黒い恥辱」と呼び、「第一次大戦では若い娘が黒人の売春宿に強制的に連れて行かれたが、今日では若い娘が黒人を得ようと必死になっている」と非難した。⁴²⁾ ナチスの人種主義的秩序のなかで最底辺に位置づけられていた黒人を、ドイツ人の多くはアメリカ軍を通してはじめて目にした。占領軍兵士のなかで黒人兵は少数派であったにもかかわらず、その存在と彼らとの「親交」は、戦後の風景を深く刻印することになる。

「大きな軍用トラックをニグロが運転している。たくましく、屈託のない少年たちだ——焼酎

を飲まないかぎり。ライン河沿いの破壊された大都市の郊外にニグロのクラブがある。このクラブの前に娘たちが押しかけている。若い女性、うわべの優雅さを装った十代半ばの少女、そして上品な身なりをした中年女性。彼女たちはニグロから品定めされる。これは100年前の奴隷売買に対する復讐のようだ。」⁴³⁾

K.J.フィッシャーが47年の手記のなかで描いたこの半ば空想的な風景は、かつての「奴隷」がドイツ人女性を「奴隷」として売買しているという「植民地的風景」である。「黒い恥辱」とはこの現実に対する怒りの表現にほかならない。

占領が終わり、復興が進むにつれて、「親交」の風景は徐々に消えていった。しかし、「親交」の結果として生を受けたいわゆる「兵士児」の多くがドイツに残された。その子供の数は1951年末に94000人であり、そのなかの3000人が黒人兵との間の子供であると報告されている。したがって、このいわゆる「混血児」の数は全体数の3%をわずかにこえるだけであるが、その可視性ゆえに「混血児」は占領の痕跡を見せつけ続ける特別の存在となった。⁴⁴⁾ そのため詳細な調査が行なわれている。⁴⁵⁾ その子供をもつ母親の調査によれば、黒人兵と関係をもった動機に56%が経済的理由をあげている。レイプによる妊娠は僅かで、27%が「好意、愛」、17%が「性的な好奇心、衝動」などを理由としているが、その動機はほんらい複合的なものであろう。2割が子供の父親との結婚を希望しているが、結婚が成立したのは0.6%にすぎない。この子供の「幸福」を名目に、その排除を目的としてアメリカなどへの養子縁組政策が打ち出された。しかし、その相手は容易に見つからず、母親自身も多くが子供との生活を望んだため、「実績」は上がらなかった。先の調査では「混血児」の8割が母親のもと、7%がその親戚のもとで生活していたが、養父母先と施設に送られた子供はそれぞれ12%、3%であった。ドイツで生活することになった「混血児」はさまざまな偏見にさらされることになった。しかし、あからさまな人種的な差別はほとんど報告されていない。⁴⁶⁾ その母親には道徳的非難が浴びせられたのに対して、「混血児」には好奇心と同情の眼差しが注がれたようである。この子供たちは「他者」として社会に受け入れられ、「敗北」の可視的な記号であり続けた。

4. 「再男性化」と「敗北」の克服

多くのドイツ人が英米軍による敗北を待ち望んだとはいえ、この軍隊を「解放軍」と見なし、いたわけではない。ナチス政権による被抑圧者にとって終戦は「解放」ではありえたとしても、ドイツ人の大多数を占めたナチズムの信奉者や共感者、受益者にとって、それは「崩壊」を意味したからである。その実感は、経済生活と食糧事情が46/47年の冬に極度に悪化することによって強められた。経済的困窮はナチズムによってではなく、その崩壊と占領によってもたらされたように感じられたのである。「親交」に象徴された道徳的「頹廢」もまた、そのように理解された。

「なんてこった、ドイツ人の娘が。こんなことになろうとは誰が思っていたことでしょう。道徳のこんな墮落を。国民感情のこんな欠落を。」⁴⁷⁾

H.W.リヒターが拾い上げたこの床屋談義によれば、ナチスが支配していた時代にはこの「墮落」も、「欠落」も存在していなかったのである。世論調査も明らかにしているように、大半の

ドイツ人にとって第三帝国ではなく、その末期と占領期が「最悪の時代」として記憶された。⁴⁸⁾

その記憶のなかで「最悪の時代」の終わりを告げていたのが、48年6月に西側占領地区で実施された「通貨改革」である。すでにドイツは冷戦の境界線に沿って東西に分岐しつつあったが、49年に建国された西ドイツはこの「改革」以降、経済的に正常化の道を歩んでいるように感じられた。復興と「奇跡の経済」のなか、西ドイツ国家は西側の軍事的一員となるべく「再軍備」を1955年に決定する。男たちによって担われる軍隊をもつことになる国家と社会は、その「再男性化」⁴⁹⁾を課題とした。ジェンダー関係の逆転した「女の時代」は、「最悪の時代」の産物として克服されなければならなかった。

興味深いことに、一般兵役義務の導入に際して西ドイツ人は、「防衛」よりも「若い男性の教育」にその意味を見出していた。56年の世論調査⁵⁰⁾では、前者の軍事的課題（14%）よりも、後者の教育的課題（43%）が優先され、60%の成人が「若者に秩序と礼儀を教える」ために軍隊が必要であると答えていたのである。その際に教育されるべき「若者」として想定されていたのは、エルヴィス・プレスリーなどのロックン・ロールに熱狂する「アメリカナイズ」された青年層であった。当時、「ハルプシュタルケ（不良、チンピラ）」と呼ばれた青年集団が街頭騒動を引き起こしていたが、この集団はアメリカ大衆文化の産物と見なされたのである。「アメ公のスケ」がアメリカの物質主義的な魅力に屈した非ドイツ的女性だったすれば、この青年たちは物質主義的な「浅薄」な大衆文化に汚染された「女々しい」男性だったのである。⁵¹⁾

市民階級にとってアメリカの大衆文化は「浅薄」だったかもしれないが、労働者階級にとってアメリカは「可能性の国」でもありえた。そして、ソ連の「ベルリン封鎖」によって、終戦期にドイツ人がアメリカに抱いていた「希望」は実現された。かつてベルリン市民の頭上に爆弾を降り注いでいた西側連合国は大規模な空輸作戦を行ない、いまやベルリン市民のために食料や燃料、日用品を運び届け、その「封鎖」を打ち砕いたのである。このような冷戦の過程のなかで、アメリカ的な生活スタイルは冷戦の武器としての価値を認められ、「親交」した女性はその生活様式を身につけた先駆者となっていった。47年5月3日付の『シュピーゲル』誌⁵²⁾は、ドイツ人の「ガール・フレンド」が「ジルバ」を踊る二枚の写真（一枚は黒人兵と踊る少女、もう一枚はダンスでスカートを捲り上げている少女）を並べ、「アメリカのテンポをアメリカ兵は輸入した」と解説している。この写真に対するドイツ人の反応はさまざまであろうが、ここでは少女たちは単なる「敗者」ではなく、同盟国との友好親善の担い手としても映し出されている。冷戦下の「再男性化」は同盟国の大衆文化に対してある程度まで許容せざるをえなかったのである。そして、相手が白人であり、その行為が売買春でなく、生活水準の上昇を求める女性の求愛行動であるかぎり、アメリカ人との「親交」が非難される筋合いは失われていったようである。同誌はその一ヵ月後に「神のもとにある国への飛翔」と題して、「42人のドイツ娘と5人の赤ん坊」がアメリカでの結婚生活のために旅客機のトラップを昇っていく写真を掲載している。⁵³⁾1949年までに2万人以上のドイツ人女性が「戦争花嫁（Kriegsbraut）」、あるいは「占領花嫁（Besatzungsbraut）」としてアメリカに移住した。⁵⁴⁾

そして、軍事同盟を結ぶことによってアメリカによる敗北の記憶は薄められた。しかし、銃口を向けることになる東側の国家に対しては、「不能」となった過去をもつ男たちは火急に「再男性化」され、敗北が克服されなければならなかった。第二次世界大戦、とくに東部戦線を描

いた「戦争映画」が50年代中ごろから盛んに製作されているが、今日の視点からこれらの映画を分析してみるならば、「再男性化」がその重要なテーマであることが理解できる。一例として、1958年に公開されたヒット作『スターリングラードの医師』を取り上げてみよう。

第二次世界大戦の敗北によって多くのドイツ兵がソ連下で捕虜になり、大量の死亡者を出したあとに、多くの生存者が「戦争犯罪人」の判決を受けてその地に取り残され、捕虜収容所で強制労働に服した。その収容所がこの映画の舞台であり、主人公は脳外科を専門とする元ヴェルツブルク大学教授の軍医ベラーである。「アジア人」の所長によって率いられた捕虜収容所の病棟で働きながら、彼はその冷静な判断力と利他的な行動から、捕虜たちの実質的な指導者になっていった。『スターリングラードの医師』は、この主人公が収容所の非人道性と闘いながら、医師としての技能を駆使して捕虜たちの生命を守り、最終的にその解放に貢献していくという英雄物語である。

台詞のないまったくの脇役を除いて、この映画には二人のロシア人女性が登場する。女医のカザリンスカヤは、入院患者数の割合を定めた党の命令を忠実に守り、労働不能な患者にも「労働可能」を言い渡すような無慈悲な態度によって、捕虜たちから嫌悪されていたが、その性的魅力のために彼らの欲望の対象となっている。捕虜の一人で、主人公ベラーの教え子でもあり、彼の医療を補佐していたゼルノウは、そのようなカザリンスカヤとつねに衝突していたが、彼女への思いは憎悪から愛情へと徐々に変わっていく。彼女が粗暴な司令官マルコフと性的関係を結んでいたことは知られていたが、ゼルノウはいきなり彼女の唇を奪う。カザリンスカヤはこの行為に狼狽し、最初は拒否したものの、この危険な愛情関係を徐々に受け入れ、肉体を許した。このことを察知したマルコフは、ゼルノウを彼女から引き離すために、彼の帰郷を画策する。こうしてゼルノウとカザリンスカヤは離別を余儀なくされたが、別れの激しい抱擁の姿をマルコフに目撃されてしまう。マルコフの怒りの殴打に毅然と抵抗したゼルノウはその場で射殺され、カザリンスカヤも逮捕される。

もう一人のロシア人女性は軍人の身分で事務労働に従事しているタマーラである。可憐な女性として演じられている彼女は、盲腸で病床に臥した捕虜のシュルタイスに恋心をいだき、その命を救うことに一役買う。その想いは実り、二人はプラトニックな恋愛関係を結ぶことになるが、この関係もシュルタイスの帰郷で終ることになる。

酒井直樹は「国籍、民族や人種の違う登場人物の間の国際恋愛を描いた商業映画の作品はほとんど例外なく、外交関係や国際政治のアレゴリーになっている」⁵⁵⁾と指摘しているが、このことは『スターリングラードの医師』の二つの恋愛関係にまったく当てはまる。まず、ゼルノウとカザリンスカヤとの関係においては、独ソの現実の支配-被支配関係は欲望の空想のなかで逆転され、敗北は心理的に克服されている。つまり、「不能」となったドイツ人の「ペニス」はふたたび「勃起」し、ロシア人女性を同胞男性から「奪い」、同意によって「征服」したのである。親密な空間のなかでもカザリンスカヤはマルコフには上官としての、ゼルノウには司令官としての立場を崩さず、凜とした態度を保っていたが、別れの抱擁と射殺の場面で彼女は初めて女としての「弱々しい」感情をあらわし、「女らしさ」と人間性を取り戻した。そしてその禁断の恋のために、射殺されたゼルノウと同様に、彼女も収容所体制の「犠牲者」となってしまった。かつて銃口を突きつけてドイツ人女性の性を「奪った」ロシア人は、ドイツ人が同意

によってロシア人女性の性を獲得すると、ふたたび銃口を突きつけただけでなく、その「奪われた」女性も制裁したのである。こうしてソ連は、いまなお同意なき征服をめざす「野蛮」な体制として表象された。一方、シュルタイスとタマーラの恋愛は、アメリカ兵とドイツ人女性との同意に基づく「親交」の写しとなっている。シュルタイスは病床で彼女の軍服姿とドレス姿の二枚の絵を描き、「軍服はよくない、こっちの方がいいよ、タマーラ」と言いつつ、物質的欲望を満たしうる西の市民生活へと彼女を誘っている。冷戦下の「再軍備」の過程に製作された『スターリングラードの医師』ではまさに、セクシャリティの「再軍備」も実践されていたといえよう。

5. 敗北を「抱きしめ」ということ

ジョン・ダワーは、「[白人の責務]という言葉で知られる植民地主義的なうぬぼれが厚かましくも実行された」⁵⁶⁾ アメリカ占領下の日本を描いた著作を、『敗北を抱きしめて (Embracing Defeat)』と命名した。「パンパン」に関する彼の叙述を読むとき、この題名は不気味なほどリアリティをもってしまふ。占領下の日本人の姿にこのような性的なレトリックを用いたことの是非をここでは問わないが、植民地主義とセクシズムの密接な関係をこの題名は適切に表現しているといえよう。

戦後のドイツで勝者を「抱きしめ」た女たち——性と引き替えに得た贅沢品を身につけて、外国兵と腕を組んで歩くという彼女たちのイメージは、「異常な時代」の産物として戦後の風景の陰画となった。その陽画を飾り立てたのは「瓦礫の女たち」である。スカーフを頭に巻き、汗だくになりながら、男たちが起こした戦争によって積み上げられた瓦礫を甲斐甲斐しく運び出すその姿は、戦場に倒れ、疲弊して帰還した男たちに代わって未来の礎をいち早く築いていた女性像として、戦後復興のあり方を表象し、戦後の神話を構成した。⁵⁷⁾ ここではジェンダー関係が逆転しているはずはない。そして、この「ドイツ」女性のなかにはレイプの被害者はいたかもしれないが、敵兵に身をゆだねる女性がいるはずはない。戦後の記憶のなかで、「抱きしめ」た女たちはこの「瓦礫の女たち」の引き立て役を演じることになる。

そして、「抱きしめ」た女性の行為に対する拒否反応は、日本と比較するならばずっと激しかった。その意味でドイツ人は、日本人のように敗北を「抱きしめ」ようとはしなかった。このことは非ナチ化政策に対する態度にもあらわれていよう。しかし問題は、敗北を「抱きしめ」ることの拒否反応がいったい何に基づいているのかということである。それは、西欧人としての植民地主義的な優越感情にあるといわざるをえない。「抱きしめ」た男性がロシア人や黒人であったときに最も激しい拒否反応が生じたのは、多くのドイツ人がそこに植民地主義的な「秩序」の逆転を見たからである。黒人との「親交」は「混血」をもたらす「秩序」の侵犯行為だった。

たしかにアメリカ白人は「洗練された」国民として認められ、この国民による敗北と占領は甘受されたが、「浅薄」な文化しかもたない「物質主義的」なアメリカ人というイメージが大きく揺らぐことはなかった。英米軍による敗北を待ち受けて、その支配を戦略的に受け入れたのはおもに市民層であったが、このようなアメリカ観を抱いていたのもおもに市民層であった。

アメリカ人を「抱きしめ」る行為が「物質主義的」な誘惑に屈した道徳的「退廃」と見なされたとき、そこには「物質主義的」な労働者層に対する階級的な偏見も絡んでいたのである。

そして、「最悪の時代」からの脱出としての「正常化」の過程は、「再男性化」であると同時に、植民地主義的な「秩序」の回復の道でもあった。敗北と占領は冷戦に基づく戦略的思考のなかで受け入れられ、冷戦は西ドイツ人に「敗者復活戦」を準備し、ここでは「物質主義的」な大衆文化も武器として用いられた。こうして、かつて植民地主義的な侵略戦争を行なった東欧に対してふたたび植民地主義的な視線が注がれ、敗北は心理的に忘れられることができた。

ここに日独の相違を確認することができよう。日本人は敗北とともに「白人」の植民地主義的な「秩序」を受け入れることで、アメリカの植民地主義的な「白人の責務」にも同意したが、西ドイツはこの「秩序」の頂点の一員に自らを位置づけ続けた。したがって、ドイツ人が敗北と占領による植民地化に抗したとすれば、それは反植民地主義ではなく、植民地主義的なナショナリズムによってなのである。一方、冷戦体制の西側陣営に帰属することによって、「東」に対しては植民地主義的な「秩序」を保持することができた点で、日独に相違はない。両国が「東」に対して行なった植民地主義的な侵略行為を戦後長らく忘却しようとしたのはそのためである。

冷戦が終結したのちに、そして「西」と「東」、あるいは「北」と「南」でさえも境界線が曖昧になったグローバリゼーションの時代に、このような状況は変化したのであろうか？ ドイツに関しては紙面上の制限から述べることはできないが、近年の日本における変化について指摘しておきたい。それは、アメリカあるいは欧米の社会と国家が、日本が見習うべきモデルとしての意味を失っているということである。この心理的状況のなかで、冷戦において自覚はされながらも、克服されようとはしなかった対米従属の政治・外交状況を打開しようとする動向が顕著となり、戦後の克服が叫ばれるようになった。こうして、日本の戦後体制を植民地化として認識する言説と、その状況を克服しようとする欲求は広がりつつあるといえよう。そしてその克服を求めるあり方は、時代状況の相違をあえて無視するならば、戦後のドイツの状況と類似しているように思われる。つまり、植民地主義的なナショナリズムによる植民地化の克服である。例えば、マンガを通して大きな影響力を与えている小林よしのりは、浜田幸一がテレビ番組で「この中で日本はアメリカの植民地でないと思っている者は手を挙げろ！」と叫んだあとに静寂が走ったことを紹介し、「もはやこのゴールデンタイムに放送される番組で「日本はアメリカの植民地、もしくは属国である」と公言してもかまわない時代になったのだ」と嘆いている。彼自身も日本がアメリカの「属国」であることを認識しているのだが、彼の嘆きは、多くの日本人がその事実を「しょうがない、そのとおりだろう」と認めてしまっていることにある。そこに彼は「主体性を失った日本人」を見ている。⁵⁸⁾ 彼にとって、日本の植民地支配と侵略戦争に謝罪し続けて、民族の誇りを失ったという「サヨク」もまた「主体性を失った日本人」なのである。西川氏が植民地化に感じた「屈辱」を、小林よしのりはナショナルな範疇のなかで感じ取っている。その克服を植民地主義の論理で達成しようとする彼は、それゆえに日本が植民地化によって与えた「屈辱」にはあきれほど鈍感である。「従軍慰安婦」問題に対する彼の反応や、「平和」を享受する市民や「聖戦」に挑む日本兵の描き方からは、彼のセクシズムと同時に、戦後社会を「再男性化」しようとする思惑を容易に読み取ることができる。つま

りここには、植民地主義的なナショナリズムによる植民地化を植民地主義的なナショナリズムで克服するという悪循環が見いだされる。

しかし私たちは、西川氏の提示した「植民地なき植民地主義」概念が示しているように、現在の植民地主義が国家主権を媒体にした領域支配として機能しているのかという問いを立てなければならない。もしそれがグローバルな主権を媒体としているのなら、「アメリカ帝国主義」に対する「独立運動」は敵を見誤っていることになる。もしそれがネットワーク状の支配をめざしているとすれば、国民国家を単位とした反植民地主義運動は戦術を誤っていることになる。したがって、いま求められている新しい植民地主義論は、植民地主義とナショナリズムの共犯関係を歴史的に解明し、反植民地主義とナショナリズムの結合を解き放つ論理と戦術を構築しなければならないであろう。

注

- 1) Saul K. Padover, *Experiment in Germany. The Story an American Intelligence Officer*, New York 1946, P.18.
- 2) Klaus-Jorg Ruhl, (Hg.), *Deutschland 1945 : Alltag zwischen Krieg und Frieden in Berichten, Dokumenten und Bildern*, 3. Aufl., Darmstadt 1985, S.52f.
- 3) Vgl., *Ibid.*, S.87-91.
- 4) *Ibid.*, S.82-87
- 5) Padover, *Experiment*, S.112.
- 6) *Gebbers-Reden*, Bd. 2: 1939-1945, hg., Helmut Heiber, Düsseldorf 1971, S.433.
- 7) ウィリアム・シャイラー（大島かおり訳）『第三帝国の終り』筑摩書房，1987年，53-54頁。
- 8) Günter Moltmann, *Amerikaklischees der deutschen Kriegspropaganda 1941-1945*, in: *Amerikastudien* 31 (1986), S.314.
- 9) Padover, *Experiment*, S.273.
- 10) *Ibid.*, P.285
- 11) Ulrich Borsdorf, Lutz Niethammer, (Hg.), *Zwischen Befreiung und Besatzung. Analysen des US-Geheimdienstes über Positionen und Strukturen deutscher Politik 1945*, Wuppertal 1976, S.153f.
- 12) Anna J. Merritt, Richard L. Merritt, ed., *Public opinion in occupied Germany. The OMGUS surveys, 1945-1949*, Urbana 1970, S.134.
- 13) *Ibid.*, S.181.
- 14) Elisabeth Noelle, Erich Peter Neumann, (Hg.), *Jahrbuch der öffentlichen Meinung, 1947-1955*, Allensbach am Bodensee 1956, S.146.
- 15) *Ibid.*, S.140.
- 16) Padover, *Experiment*, S.62.
- 17) Borsdorf, Niethammer, (Hg.), *Zwischen Befreiung und Besatzung*, S.37f.
- 18) 1945年11月から1946年8月までの8回の調査で，80%がこの裁判を「公正」だと判断している。Merritt, Merritt, ed., *Public opinion in occupied Germany*, S.93.
- 19) Noelle, Neumann, (Hg.), *Jahrbuch der Öffentlichen Meinung, 1947-1955*, S.142.
- 20) 深川美奈「アメリカ占領下ドイツにおける民主化政策——非ナチ化政策を中心に——」『国際政治』第125号（2000年10月）を参照。
- 21) Merritt, Merritt, ed., *Public opinion in occupied Germany*, S.171.
- 22) Ruhl, (Hg.), *Deutschland 1945*, S.137.

- 23) Borsdorf, Niethammer, (Hg.), *Zwischen Befreiung und Besatzung*, S.36.
- 24) Jurgen Zinnecker, *Jugendkultur, 1940-1985*, Opladen 1987, S.60f.
- 25) Kurt J. Fischer, *US-Zone 1947*, in: Hans A. Rümelin, (Hg.), *So lebten wir ... Ein Querschnitt durch 1947*, Stuttgart 1997, S.3.
- 26) Johannes Kleinschmidt, "DO NOT FRATERNIZE." *Die schwierigen Anfänge deutsch- amerikanischer Freundschaft 1944-1949*, Trier 1997, S.155.
- 27) Padover, *Experiment*, S.263.
- 28) Hilde Thurnwald, *Gegenwartsprobleme Berliner Familien*, Berlin 1948, S.52.
- 29) *Ibid.*, S.146f.
- 30) Ruhl, (Hg.), *Deutschland 1945*, S.123f.
- 31) Anonyma, *Eine Frau in Berlin. Tagesbuchaufzeichnungen vom 20. April bis 22. Juni 1945*, Frankfurt/M., 2003, S.51f.
- 32) Norman M. Naimark, *Die Russen in Deutschland. Die sowjetische Besatzungszone 1945 bis 1949*, Berlin 1997.
- 33) Kleinschmidt, "DO NOT FRATERNIZE," S.104.
- 34) Thurnwald, S.191.
- 35) Vgl., Elizabeth Heineman, *The Hour of the Woman. Memories of Germany's "Crisis Years" and West German National Identity*, in: *American Historical Review*, April 1996. 拙稿「ドイツ「零時」の表象——瓦礫と廃墟の記憶」『立命館文学』第597号（2007年）
- 36) Vgl., Heineman, *The Hour of the Woman*. Robert G. Moeller, *War Stories. The search for a usable past in the Federal Republic of Germany*, Berkeley, Los Angeles, California 2003, P.51-84. Matthias Beer, *Die Dokumentation der Vertreibung der Deutschen aus Ost-Mitteleuropa: Hintergründe - Entstehung - Wirkung*, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 50 (1999). Ders., *Im Spannungsfeld von Politik und Zeitgeschichte: Das Grassforschungsprojekt 'Dokumentation der Vertreibung der Deutschen aus Ost-Mitteleuropa*, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 49 (1998).
- 37) Kleinschmidt, "DO NOT FRATERNIZE," S.156f.
- 38) Christoph Boyer, Hans Woller, *Hat die deutsche Frau versagt? Die neue Freiheit der Frauen in der Trümmerzeit 1945-1949*. in; *Journal für Geschichte*, 2/1983, S.36.
- 39) Vgl., Moltmann, *Amerikaklischees der deutschen Kriegspropaganda*. Kaspar Maase, *BRAVO Amerika. Erkundungen zur Jugendkultur der Bundesrepublik in den fünfziger Jahren*, Hamburg 1992.
- 40) Peter Seewald, <Gruess Gott, ihr seid frei> ; *Passau 1945*, in: Wolfgang Malanowski, (Hg.), *1945. Deutschland in der Stunde Null*, Reinbek 1985, S.114f.
- 41) Thurnwald, S.156.
- 42) Kleinschmidt, "DO NOT FRATERNIZE," S.182.
- 43) Fischer, *US-Zone 1947*, S.7f.
- 44) Vgl., Heide Fehrenbach, >Ami-Liebchen< und >Mischlingskinder<. *Rasse, Geschlecht und Kultur in den deutsch-Amerikanischen Bewegung*, in: Klaus Naumann (Hg.), *Nachkrieg in Deutschland*, Hamburg 2001.
- 45) Luise Frankenstein, *Soldatenkinder. Die unehelichen Kinder ausländischer Soldaten mit besonderer Berücksichtigung der Mischlinge*. München, Düsseldorf, Genf 1954.以下の統計に関してはS.24f. 34.
- 46) Frankenstein, *Soldatenkinder*, S.34f. Hermann Ebeling, *Zum Problem der Deutschen Mischlingskinder*, in: *Bildung und Erziehung* 7 (1954).
- 47) Hans Werner Richter, *Unterhaltungen am Schienenstrang*, in: *Der Ruf* 1 (1.10.1946), S.6.
- 48) 1951年の世論調査で1945年から48年までが80%の市民によって「ドイツが最悪だった時期」と見なされ、戦前のナチス時代と戦中のナチス時代は2%および8%にすぎなかった。Noelle, Neumann,

- (hg.), Jahrbuch der Öffentlichen Meinung. 1947-1955, S.125.
- 49) Vgl., Ute G. Poiger, Krise der Männlichkeit. Remaskulinisierung in beiden deutschen Nachkriegsgesellschaften, in: Klaus Neumann (Hg.), Nachkrieg in Deutschland, Hamburg 2001. Robert G. Moeller, The “Remasculinization” of Germany in the 1950’s: Introduction, in: Signs: Journal of Women in Culture and Society, 1998, vol. 24. no.1.
- 50) Noelle, Neumann, (hg.), Jahrbuch der Öffentliche Mienung 1957, Allensbach 1957, S.308.
- 51) Vgl., Kaspar Maase, BRAVO Amerika. Thomas Grotum, Die Halbstarcken. Zur Geschichte einer Jugendkultur der 50er Jahre, Frankfurt am Main 1994. Uta G. Poiger, Jazz, rock, and rebels : cold war politics and American culture in a divided Germany, Berkeley 2000.
- 52) Der Spiegel, 3.5.1947, S.2.
- 53) Ibid., 7.6.1947, S.5.
- 54) Kleinschmidt, “DO NOT FRATERNIZE,” S.170.
- 55) 酒井直樹「映像とジェンダー 映画のなかの恋愛と自己同一性の流動性」岩崎稔／大川正彦／中野敏男／李孝徳編『継続する植民地主義』青弓社，2005年，276頁。
- 56) ジョン・タワー（三浦陽一，高杉忠明，田代泰子訳）『敗北を抱きしめて』上，岩波書店，2001年，6頁。
- 57) 拙稿「ドイツ「零時」の表象——瓦礫と廃墟の記憶」を参照。
- 58) 小林よしのり『沖繩論』小学館，2005年，127－9頁。

